

長々と源平盛衰記の記述を取り上げて来たが、歴史の上で『我が根上町の町名』の由来が此処にある。

明治四十年、江ノ島・福江・釜屋の三町が合併して、さて新しい町の名前を如何したものであろうかと言う問題が提起された時に、恐らく識者が、この件を採り上げることにしたと考えられるからである。

その時代の根上り山の有様は、「東は海、西は沼で際限なし」との表現で詠われているので根上り松への道は、井上方の平家防戦には格好な戦場であったと考えられる。

砺波山まで後退した、木曾の義仲勢は、有名な「俱利伽羅山の戦い」で平家の大軍に圧勝し、京まで押して攻め上った物語は誰知らぬものは無いであろう。

「木曾街道」は、この事件以後、根上町を縦断し町の発展をこの目で見てきた歴史の生き証人である、と言つても過言ではあるまい。

## 木曾街道の歴史

以上の歴史があつて「木曾街道」の命名の経緯がお分かり戴けたと思ふが、更に詳しく細部に涉つて考察を試みたい。

初めは、駅馬の道を考えてみると、木曾街道は安宅から比叡に田上

と經由しているので、当時の道は海岸線を通つたことは誰でも判るであろう。

先に記したように、初めは駅の間隔は三十里（現在の四里）であつたら、この点でも理解できる。

次に、藩政時代になると、前田藩は防衛のために手取川に橋を作らず、現在の県道の「美川の渡し」を橋を作らず徒歩涉りと決められた。

従つて、手取の洪水などで粟生が渡河禁止になつた場合この渡しが代替としての機能を果たすことになつた、時代が長く続いた。

「あかあかと日はつれなくも秋の風」の芭蕉の句は、初秋の金沢から小松までの道での吟詠であり、加賀舞子の「はまなすの丘」に、この句碑を建てた理由はここにある。

また、藩政時代の木曾街道の機能は、伝馬の道に決められたので、現在の県道は両側に松並木が亭々と植えられた道を伝馬が、次々と通過した重要な道であり、別名「湊回り道」と呼ばれた。

このように木曾街道は、古い時代、海岸線を通り、次いで現在の県道が長く伝馬の道として、物品が馬によって運ばれたのである。

北陸高速自動車道路が開通し、更に自動車道路に併設された『産業道路』が開通した時に、木曾街道を産業道路の名前として、わが町の歴史の一端を飾ることになつたのがこの歴史ある道の変遷である。

その後の木曾街道に於ける源氏方の歴史を書かなければ、片手落ちの非難を免れまい。